





昭和100年記念展

第3回県史編さん企画展

新聞記事からみえた百年前の湖国







2026.2.24(火)～5.21(木) 滋賀県立公文書館

tel:077-528-3122 見学無料 休館日:土日、祝日

【左上】立憲民政政友会支部(木村屋)写真(滋賀県史)
 【右上】『大嘗祭悠紀斎田記念帖』(寛566)
 【中央上】『滋賀湖ホテルメニュー表』(昭和31(1956))
 【中央下】三津浜学園開校写真(1943年(昭和18年)11月7日付滋賀新聞【昭か31(14)】)
 【左下】長距離小貼送郵便(滋賀県水産試験場事業成績)第1巻、国立国会図書館デジタルコレクション
 【右下】陸井虎雄様長寿記念贈贈儀式(第10回全国湖沼河川農林研究会要録、同上)

令和5年度から当館では、県史編さん事業を進めており、その資料収集の成果の一部を県史編さん企画展として発信しています。今回の展示では、令和8年に昭和元年から起算して満100年を迎えることを記念し、県史編さんで収集した新聞記事を手がかりに、昭和戦前期の湖国を振り返ります。

昭和の時代とは、激動と変革の時代でした。しかし、それは令和の現在と全く断絶したものではなく、現代へとつながっています。昭和初頭は現在につながる本格的政党政治の起点であり、ウシガエルの移入や小鮎の県外移出は現代の外来種問題にもつながります。また国際観光ホテルの先駆けとなった琵琶湖ホテルや近江学園の前身である三津浜学園の創設は現在のインバウンドや社会福祉にも通じるものです。

これらのトピックスを通じて、昭和の時代と現在とのつながりをみなさんと考えていきたいと思います。

【展示概要】

期間 令和8年2月24日(火)～5月21日(木)

会場 滋賀県立公文書館(県庁新館3階)

日時 月曜日～金曜日(祝日、年末年始を除く)

9時～17時

内容 新聞記事17点、滋賀県特定歴史公文書等9点

(合計26点)



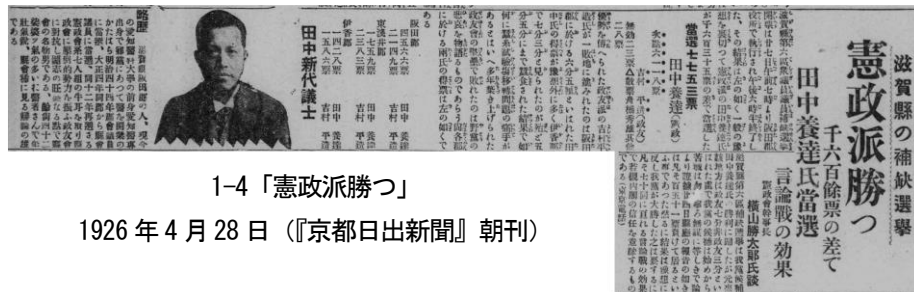
1-1「政友会滋賀支部 選挙改正委員会」
1924年8月19日（『京都日出新聞』滋賀付録）



1-2「憲政会幹部会で非政友大举憲政へ」
1925年11月5日（『京都日出新聞』滋賀付録）



1-3「青年同盟会の除名事件真相」
1925年12月22日
（『京都日出新聞』朝刊）



1-4「憲政派勝つ」
1926年4月28日（『京都日出新聞』朝刊）

滋賀県における政友会と憲政会

一九二五年（大正一四年）に男子普通選挙制度が導入されました。この導入に先立って滋賀県政友会支部で行われた選挙法改正の調査委員会では、二五歳以上の「世帯主」の「男女」に選挙権を与える案が検討されていたことが注目されます（資料1-1）。

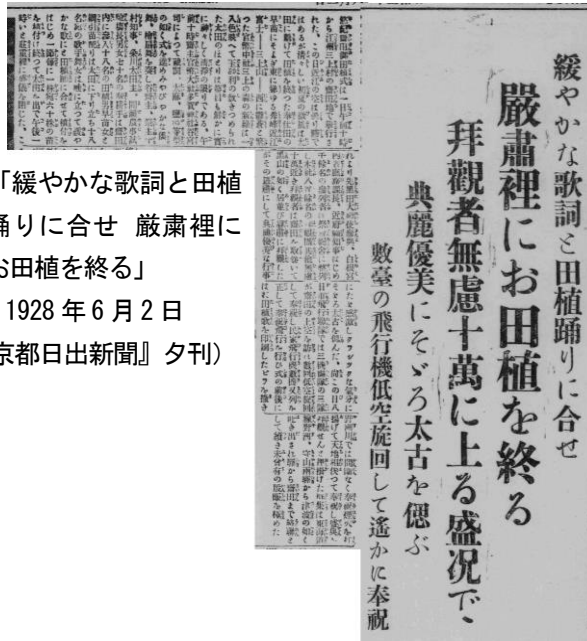
男子普通選挙は、国民の政治参加拡大をもたらしました。また、滋賀県では、明治後期から県政に影響力を有していた国民党系の勢力が分裂して、当時の主要政党である政友会と憲政会に合流し、二大政党制を形成します。

政友会に対抗する憲政会は、生産者の負担軽減と同時に、政友会の支持基盤を切り崩すために、近江米同業組合の県営化を主張しました。また旧国民党系グループも憲政会に合流します（資料1-2）。

一方、旧国民党系でも野洲郡の清水銀蔵は、政友会に入党しました。そのため、それまで反政友会の立場から清水を支援してきた青年団体である「野洲青年同盟会」は、以後は清水を支援しないことと、憲政会支持を決議しました（資料1-3）。

一九二六年四月の補欠選挙では、憲政会の田中養達が入選しました。この背景には、蚕業試験場移転問題という地域の利害対立も存在しました（資料1-4）。この後、滋賀県では、政友会と憲政会の対立が激化していくことになります。

（堀 雄高）



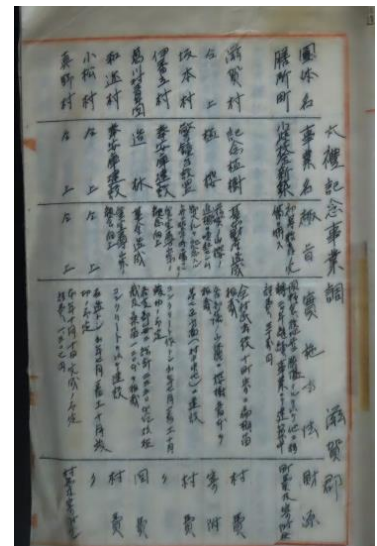
2-2 「緩やかな歌詞と田植踊りに合せ 厳肅裡にお田植を終る」
1928年6月2日
（『京都日出新聞』夕刊）



2-1 「復命書」1928年3月6日
【昭た452(11)】



2-4 「五風十雨恙がなく けふ拔穂の儀を終る」
1928年9月17日（『京都日出新聞』夕刊）

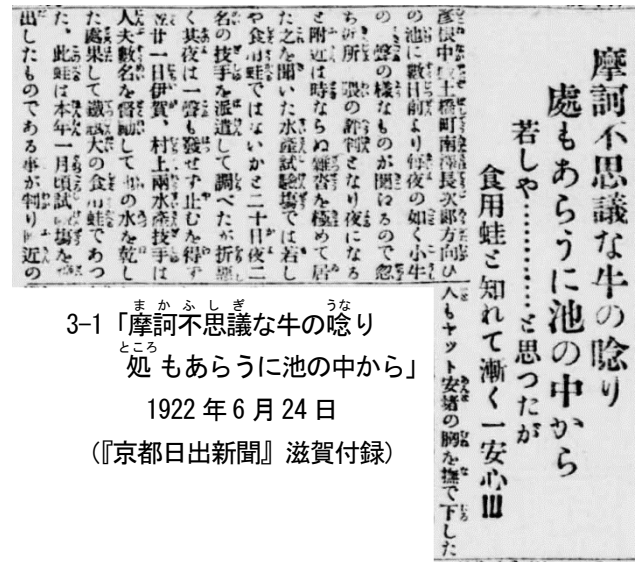
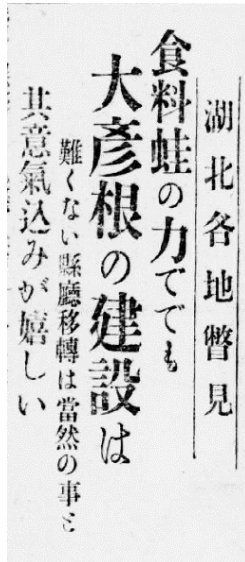
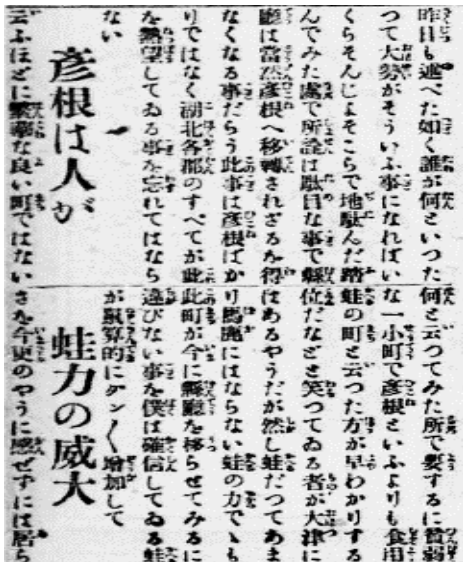


2-3 「大禮記念事業調」
1928年8月6日【昭き79-2(2)】

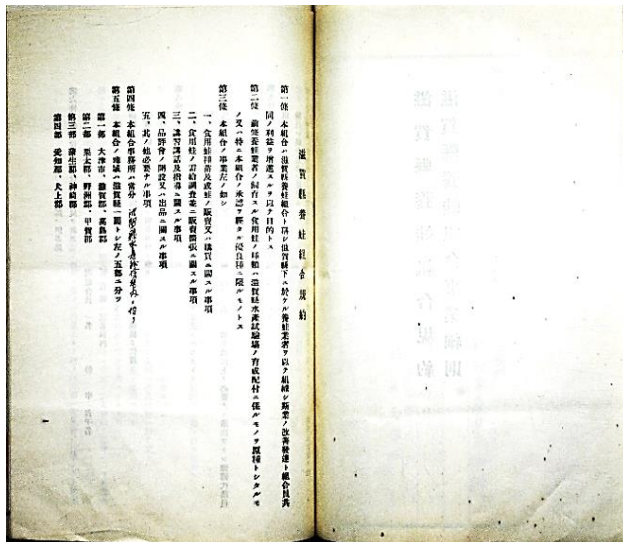
大嘗祭と滋賀県

一九二八年（昭和三年）十一月、昭和天皇の即位儀礼である即位礼と大嘗祭（あわせて「大札」）が行われ、滋賀県は、天皇が大嘗祭で神々に供え、共食するための米を収穫、奉納する悠紀齋田を設ける県に選ばれました。滋賀県は、彦根測候所の気候調査（資料2-1）など、さまざまな部署による調査を行った上で、悠紀齋田を野洲郡三上村（現・野洲市三上）の条川春治の所有田にすることに決定しました。六月に行われた御田植祭は、千名あまりの参列者と一〇万名にものぼる拝観者が訪れ、盛況であったと報じられ、京都日出新聞社は、拝観団を組織して参観しています（資料2-2）。大札にあわせて、県下の町村や各団体で様々な記念事業も行われました。滋賀県による内務省への報告では、天皇の写真と教育勅語とを収める奉安庫や戦死者を顕彰する忠魂碑の建設といった国家への忠誠心を高めるための事業のほか、病院や図書館の建設、稲作増収品評会、貯金事業といった地域の産業振興や社会事業も計画されています（資料2-3）。

九月には、稲の刈り入れを開始する儀式である拔穂祭が行われました。太田主（悠紀齋田の所有者）がお祓いをした農具で稲を刈り取り、奉納するという儀式を行い、大勢の拝観者が訪れて盛況であったといえます（資料2-4）。収穫された稲は白米・玄米として京都に送られ、大嘗祭で用いられました。（藤澤 聖哉）



3-2「湖北各地瞥見」1922年9月27・28日（右27日、左28日）
（『京都日出新聞』滋賀付録）

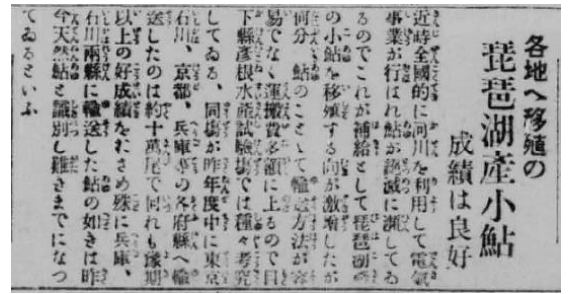


3-4「滋賀県養蛙組合同規約」1928年3月16日
【昭42 482 (4-17)】

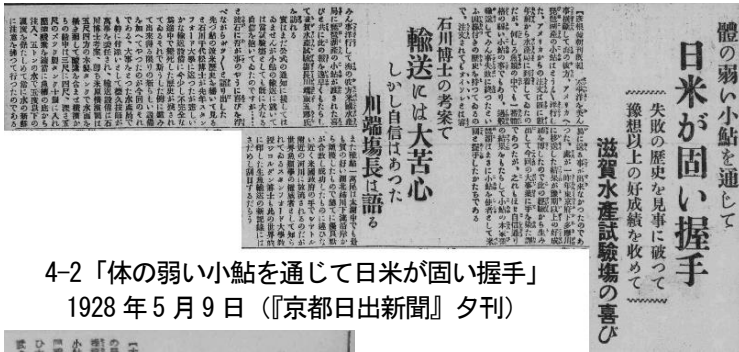
3-3「滋賀県の食用蛙」1927年9月
【昭か86 (2-2)】

ウシガエルが滋賀県にやってきた！
アメリカ原産であるウシガエルが湖国にやってきた理由は、ウシガエル養殖を農家の新しい副業とするための飼育実験にありました。当時の日本人にとって、ウシガエルはなじみのない生き物でした。そのため、実験を委託された彦根の滋賀県水産試験場から脱走したウシガエルが、その牛のような鳴き声によって怪音騒動を引き起こしたこともあり、（資料3-1）。しかし実験が行われている県水産試験場が所在していた彦根に対して「食料蛙（注・ウシガエル）」の力でも大彦根の建設は難くない県庁移転は当然の事」という意気込みがあったように、ウシガエル養殖には強い期待が寄せられていました（資料3-2）。
ウシガエル養殖への期待感是全国に広まるとともに、過激な投機ブームも生み出します。県が一九二七年（昭和二年）に昭和天皇へウシガエルを献上した時の文書をみると、県としても「投機的経営を避け副業的飼育」を推奨していたことがうかがえます（資料3-3）。つまり県としては、ウシガエル養殖の健全な発展を目指していたのです。実際、翌年には県内の養殖業者を集めた研究会も行われたようです（一九二八年三月八日付『京都日出新聞』朝刊）。こうした背景もあり、同年三月一六日には、飼育法改善や生産増進、需要開拓等の事業を通じた「副業的養蛙業」の堅実な発展を図るための組織として、滋賀県養蛙組合が結成されるに至りました（資料3-4）。
（山口一樹）

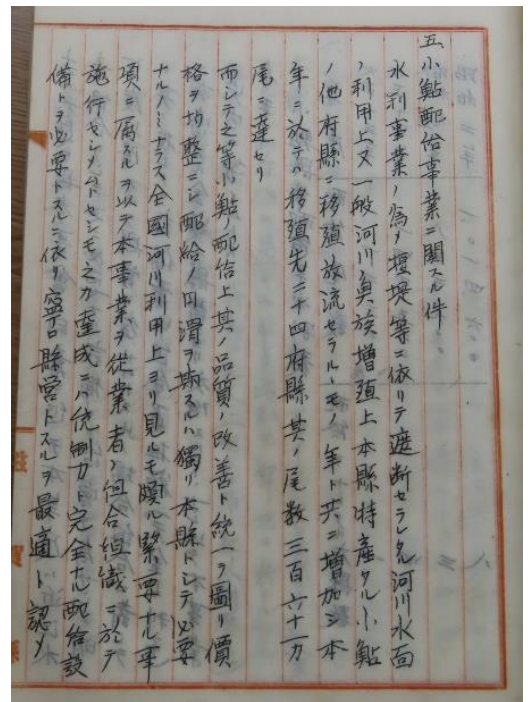
ウシガエルが滋賀県にやってきた！



4-1 「各地へ移殖の琵琶湖産小鮎」
1926年5月29日〔『京都日出新聞』朝刊〕



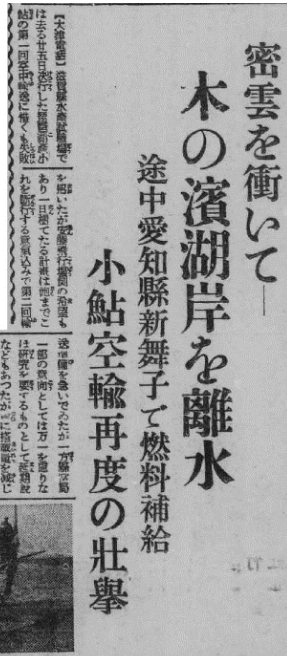
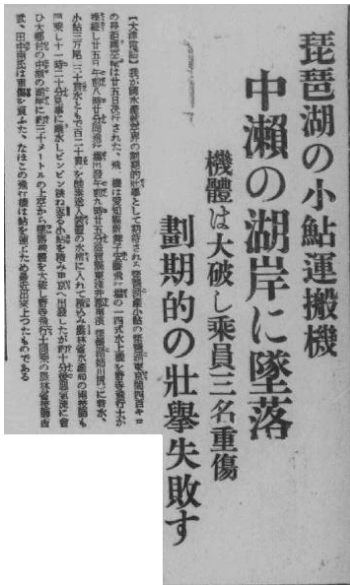
4-2 「体の弱い小鮎を通じて日米が固い握手」
1928年5月9日〔『京都日出新聞』夕刊〕



4-3 「小鮎配給事業に関する件」
1929年9月【昭お2-1 (6-7)】

4-4 「琵琶湖の小鮎運搬機中瀬の湖岸に墜落」1931年4月26日
〔『京都日出新聞』夕刊〕

4-5 「密雲を衝いて木の浜湖岸を離水」
1931年4月30日
〔『京都日出新聞』夕刊〕

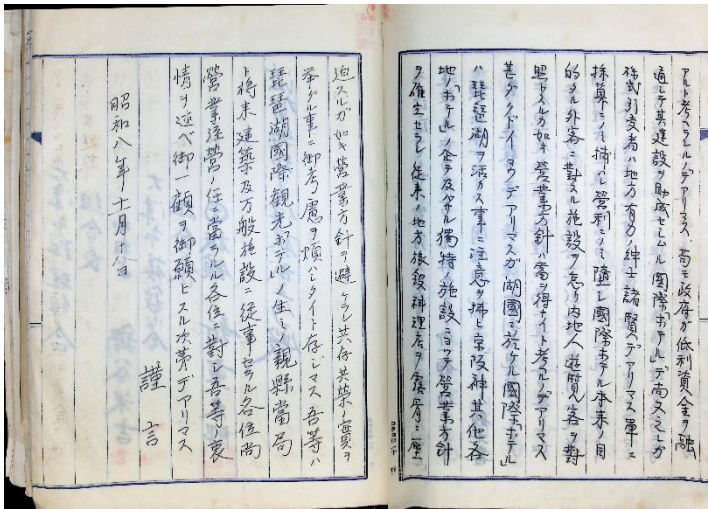


小鮎をは「ぶ」小鮎配給事業と輸送

琵琶湖の小鮎は、明治四〇年代における理学博士・石川千代松や滋賀県水産試験場等の研究により、育つ環境によって他のアユと同様に大きく成長することが判明します。大正時代に水力発電所が全国各地に建設され、アユの数が減少していた中で、琵琶湖産小鮎は、河川放流用の稚アユ（アユ苗）として注目され、県内外に出荷されました。そこで、生きたアユの運搬の発展が鍵となり、滋賀県水産試験場を中心に様々な実験が行われます（資料41）。一九二八年（昭和三年）には、研究者に不可能と言われる状況で、水産局がアメリカへの船舶輸送に成功しました（資料42）。そして、滋賀県は一九三〇年に小鮎の配給を県営事業化し、県水産試験場による配給の統括と、品質の向上・統一を図ります。小鮎配給事業は昭和期を通して県の水産行政の中でも重要な位置を占めました（資料43）。

小鮎配給事業が滋賀県にとって大事な産業となる中で、県水産試験場では航空機による運搬も試みています。一九三一年の琵琶湖—東京間の航空機による輸送実験は、一度目は墜落してしまいましたが（資料44）、数日後には再度決行され、成功しました（資料45）。実際の小鮎の輸送は自動車や列車が中心だったと考えられますが、空輸への挑戦からは、輸送の改善という至上命題に対する当時の水産関係者の情熱をみる事ができるのです。

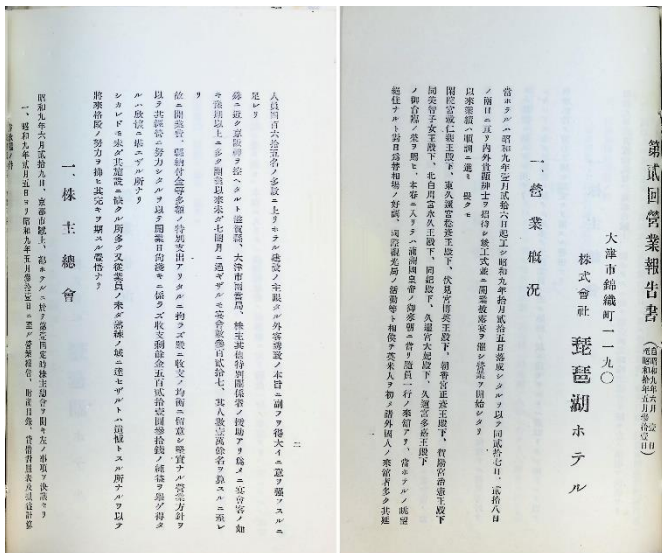
（吉水 希枝）



5-2「陳情書」(大津市料理組合、大津市旅館組合)
1933年11月18日 【昭て10-1(2-3)】



5-1「典雅優麗なる湖畔柳ヶ崎に豪壯なる国際観光光館」
1932年3月2日(『京都日出新聞』朝刊)



5-4「営業報告書」(株式会社琵琶湖ホテル)
1934~1937年 【昭て15(58)】

5-3「祝賀会場か議場か」
1932年3月2日
(『京都日出新聞』朝刊)



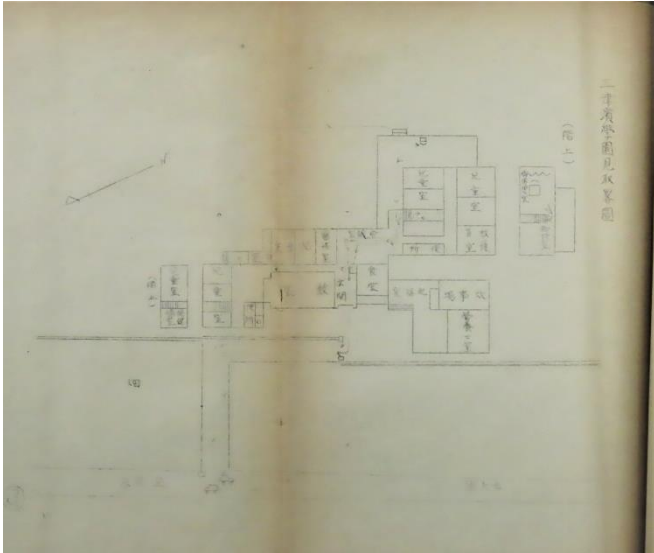
察されます(資料5-4)。
(鷲澤 遼祐)

実際の業績に目を向けると、営業開始から約七か月間で外国人利用者が四六五名に及んだとの報告以降目ぼしい業績はなく、外客誘致という本来の目的において期待されたほどの成果は上がらなかったと推察されます(資料5-4)。

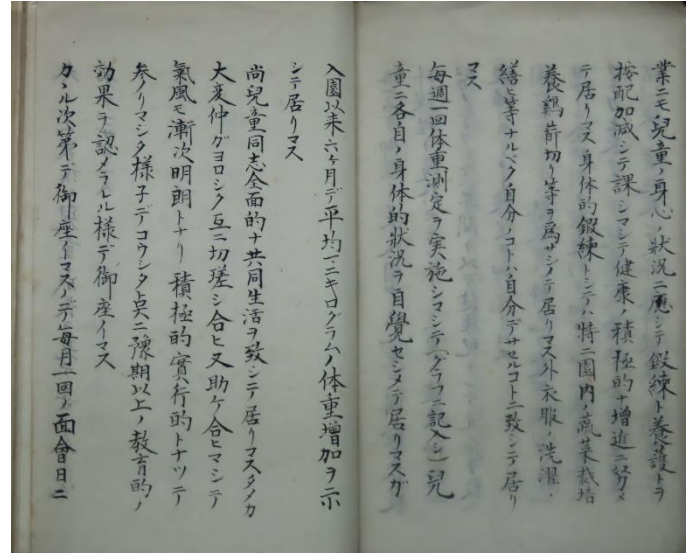
一方、地域社会は、諸手を挙げて国際観光ホテル建設に賛同した訳ではありませんでした。一九三二年、県知事に対し大津市の料理組合と旅館組合が提出した陳情書では、本来外客を主たる客層とするはずのところを営利目的で内地人遊覧客に重きを置くよう方針を転換する、との噂を受け、地元業者への圧迫を避けるよう要望しています(資料5-2)。また、営業を開始した一九三四年一〇月の竣工披露宴においては、経営維持のための後援を財界来賓者に呼びかけた伊藤武彦前知事に対し、世界恐慌の煽りを受けて以来続く農村不況の対策を優先すべきであるとして、民政党所属の県会議員が反発しています(資料5-3)。

滋賀に国際観光ホテルを
―国策事業と地域社会―
一九三〇年代初頭、慢性的な不況に喘ぐ中、対外收支改善のための国策的取り組みとして、外客(外国からの旅客)を誘致するための国際観光政策が本格化しました。一九三二年(昭和六年)、滋賀県はこの政策に呼応して、国際観光ホテルを建設する計画を発足させました。当時は琵琶湖畔につながる主要な道路の完成を目前に控えており、観光地としての需要拡大が見込まれる中での立案でした(資料5-1)。

一方、地域社会は、諸手を挙げて国際観光ホテル建設に賛同した訳ではありませんでした。一九三二年、県知事に対し大津市の料理組合と旅館組合が提出した陳情書では、本来外客を主たる客層とするはずのところを営利目的で内地人遊覧客に重きを置くよう方針を転換する、との噂を受け、地元業者への圧迫を避けるよう要望しています(資料5-2)。また、営業を開始した一九三四年一〇月の竣工披露宴においては、経営維持のための後援を財界来賓者に呼びかけた伊藤武彦前知事に対し、世界恐慌の煽りを受けて以来続く農村不況の対策を優先すべきであるとして、民政党所属の県会議員が反発しています(資料5-3)。



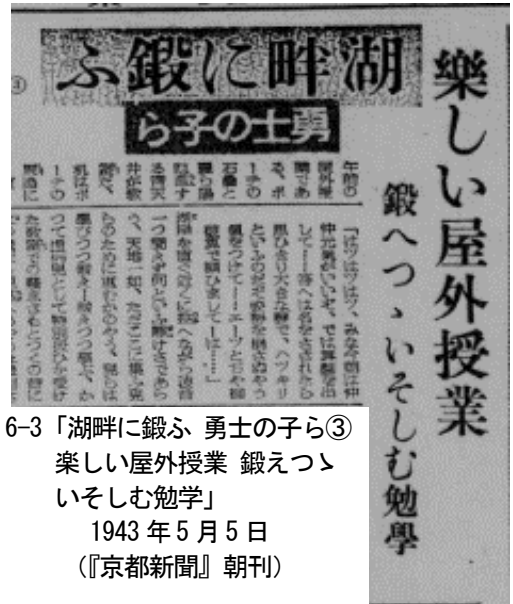
6-2 「三津浜学園見取略図」 1943 年
【昭か 29 (7-3)】



6-1 「言上書」 1943 年
【昭か 31 (17)】



6-4 「湖畔に鍛ふ 勇士の子ら③
朝夕に誦ず四則 念願は立派な兵隊に」 1943 年 5 月 8 日
（『京都新聞』 朝刊）



6-3 「湖畔に鍛ふ 勇士の子ら③
楽しい屋外授業 鍛えつゝ
いそむ勉学」
1943 年 5 月 5 日
（『京都新聞』 朝刊）

「JUGENを世の光に」
——戦時下に始まる近江学園前史——

滋賀県の障がい児施設・近江学園は、戦時下に誕生した二つの学校の流れを汲んでいます。その一つが三津浜学園でした。

三津浜学園は、一九四三年（昭和一八年）に、出征軍人の遺家族の子どもで、虚弱体質児童の教育・鍛錬施設として作られました。発足・運営の中心は、糸賀一雄や池田太郎ら、後の近江学園創設者らでしたが、三津浜学園の経営名義は恩賜財団軍人援護会で、同会から助成金も受けていました。学園の設置は銃後を支える政策の一環だったのです。皇族の行幸啓もあり、その際に作成された記録から、児童数や日課等、学園の概要を知ることができます（資料 6-1・6-2）。

開園の翌月、京都新聞では、学園を紹介する連載記事が掲載されました（資料 6-3・6-4）。朝の掃除や食事といった生活面、授業や身体測定等の学校教育の側面等、日々の風景を報じています。記事からは、皇居遥拝や軍事教練等、戦時色を色濃く反映した日課があったこともわかります。また記事の随所には「健康の増進」や「立派な兵隊に」といった言葉が現れます。

戦後に創始した近江学園は、「この子らを世の光に」という方針を掲げます。しかし戦時下では、国家の役に立つことが強く求められました。三津浜学園の子どもたちへの「励まし」や「期待」は、「虚弱」や「障害」として国家の要求に適さない人々への圧迫の裏返しでもあったのです。

（西脇 彩央）

【展示関連年表】

西暦	元号	月	日	出来事	図録
1922	大正 11	6	24	ウシガエルが滋賀県水産試験場から脱走していたと報じられる	3-1
1922	大正 11	10	-	滋賀県水産試験場、農商務省の指令によりウシガエルの分配を始める	3-2
1924	大正 13	8	19	政友会滋賀県支部の選挙法改正員会の模様が報じられる	1-1
1925	大正 14	4	21	アユ苗需要増加のため、滋賀県水産試験場は長距離汽車輸送試験を実施	4-1
1925	大正 14	11	2	憲政会滋賀県支部、幹部会を彦根にて開催	1-2
1925	大正 14	12	22	野栗青年同盟会が今後、政友会に入党した清水銀蔵を支援しない旨を決議したことが報じられる	1-3
1926	大正 15	4	27	衆議院議員補欠選挙で憲政会の田中養達が当選	1-4
1927	昭和 2	9	29	ウシガエル献上のため、滋賀県水産試験場長が上京	3-3
1928	昭和 3	2	5	滋賀県が悠紀斎田を出す地方に選ばれ、県は選定のための調査を行う	2-1
1928	昭和 3	3	16	滋賀県養蛙組合設立	3-4
1928	昭和 3	5	6	農林省水産局による琵琶湖産小鮎の米国への船舶輸送が成功する	4-2
1928	昭和 3	6	1～3	野洲郡三上村の悠紀斎田で御田植祭举行	2-2
1928	昭和 3	8	6	滋賀県が内務省に県内の各町村における大札記念事業を報告	2-3
1928	昭和 3	9	16	悠紀斎田で抜穂式が行われる	2-4
1930	昭和 5	4	-	小鮎配給事業が県営事業となる	4-3
1931	昭和 6	4	30	琵琶湖産小鮎の琵琶湖-東京間の航空機輸送が成功する	4-4・5
1932	昭和 7	3	2	新庄祐治郎知事、国際観光ホテル建設に関する声明文を発表	5-1
1933	昭和 8	11	18	大津市料理組合・旅館組合、国際観光ホテル建設に関する陳情書を提出	5-2
1934	昭和 9	10	27	琵琶湖ホテル竣工披露宴開催	5-3
1935	昭和 10	6	28	株式会社琵琶湖ホテル第2回株主総会開催	5-4
1943	昭和 18	4	2	三津浜学園開園	6-1
1943	昭和 18	5	-	『京都新聞』、三津浜学園の特集記事を掲載	6-3・4
1943	昭和 18	11	4	梨本宮妃が銃後婦人の活動状況視察のため来県、三津浜学園を訪問	6-2

《参考文献》

展示図録

新聞記事からみえた百年前の湖国

令和8年（2026年）2月24日

編集・発行

滋賀県立公文書館

〒520-8577

滋賀県大津市京町四丁目1番1号

滋賀県庁新館3階

Tel : 077-528-3122

Fax : 077-528-4813

Mail : archives@pref.shiga.lg.jp

- ・伊藤之雄『大正デモクラシーと政党政治』山川出版、1987年
- ・糸賀一雄『この子らを世の光に：近江学園二十年の願い』柏樹社、1965年
- ・井村博宣「琵琶湖産アユ種苗配給体制の成立・崩壊とその要因」

『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』第43号、2008年

- ・岡本和己「大嘗祭と滋賀県」『湖国と文化』第185号、2023年
- ・川原吉貴「昭和の大札・悠紀斎田御田植祭：近代の皇室祭礼と民衆」『歴史研究』第735号、2025年
- ・滋賀県立公文書館編『歴史公文書が語る湖国：明治・大正・昭和の滋賀県』サンライズ出版、2021年
- ・砂本文彦『近代日本の国際リゾート：一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、2008年
- ・徳久三種「水産増殖事業回顧の記」『水産界』第700号、1941年
- ・服部岩吉編『立憲政友会滋賀県支部党誌』立憲政友会滋賀県支部、1944年
- ・蜂谷俊隆「近江学園前史としての三津浜学園と「塾教育」の思想」『社会福祉学』第52巻第2号、2011年
- ・山口一樹「ウシガエルを食べた日」『湖国と文化』第188号、2024年
- ・山口一樹「多和田養蛙場について：『関西調査旅行報告書』（東京海洋大学附属図書館所蔵）より」

『滋賀県史研究』第1号、2025年